

## <エゼキエル書の概観>

1. エゼキエル書は大預言書の一つです。
2. 著者 預言者エゼキエル（「神が強めてくださる」という意味）
3. 時代背景 北王国イスラエルがアッシリヤ帝国に陥落させられ、多くの民が捕囚された。それから後に、都エルサレムバビロンのネブカデネザル王に攻撃され、南王国ユダは降伏。エホヤキン王と民は異国の地バビロンに捕囚された（BC.597）。その中に、エゼキエルがいて、彼はバビロンの地において預言者として召され（1:2,3）、その地で神に背くユダの都エルサレムの崩壊を預言した。エルサレムは BC586 年にバビロンの手に完全に落ち多くの人が国外に連れ去られたり、殺害されたりした。
4. エゼキエル書の梗概
  - 第一部 審判の預言（1～32 章）
    1. 預言者エゼキエルの召命（1～3 章）
    2. エルサレム審判の啓示（4～24 章）
    3. 諸外国審判の啓示（25～32 章）
  - 第二部 終末と希望の預言（33～48 章）
    1. エルサレムの終末（33～39 章）
    2. エルサレムの希望（40～48 章）
5. エゼキエル書の中心思想と特徴
  - ①エルサレムの審判と回復が本書の中心思想
  - ②特徴 啓示の神。  
信仰及び罪意識を個人が持つべきことを強調。  
祭司主義と預言者主義の調和。



2021年7月18日 説教「良い牧場で養って下さる主」

エゼキエル書 34 章 1～16 節

「わたしは良い牧者」（ヨハネ 10 章）と主イエスが言われた点に関連して、エゼキエル書 34 章から学びます。後ページの梗概から見ていきます。

### 1. 羊を迷わせる牧者（1～6 節）

- ①主の言葉（1～2）「次のような主のことばがあった。「人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かって預言せよ。預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ、自分を肥やしているイスラエルの牧者たち、牧者は羊を養わなければならないのではないか。」人の子」とは預言者であるエゼキエル自身のこと。「イスラエルの牧者」というのは、当時の祭司、律法学者などの神に仕える者たち。彼らに預言すべきこととして、主が言われたことは、彼らが自分を肥やしていることでした。むしろ、牧者たちがなすべきことは、羊を養うことであるということです。
- ②牧者達の実態（3～4）「あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出したものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力づくで彼らを支配した。」主のことばは続きます。牧者たちは、上等な物を食べ、暖かい羊の毛を着、太った羊をほふるにもかかわらず、弱い羊を養わず、強めず、いやさず、包まず、連れ出さず、捜さずに、むしろ暴力的に支配しようとするということです。
- ③羊たちのさまよい（5～6）「彼らは牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまった。わたしの羊はすべての山々やすべての高い丘をさまよい、わたしの羊は地の全面に散らされた。尋ねる者もなく、捜す者もない。」羊たちには牧者が必要です。しかし、牧者が羊の面倒をみずに、自分を肥やすことに心をかけていたので、羊たちは散らされてしまったのです。また、獣のえじきになってしまったのです。散らされた羊達は、高い丘をさまよい、散らされ、捜索もなされないという悲しき状態になっているのです。（参照：ヨハネ 10、ルカ 15 章）。

### 2. 牧者たちへの戒め（7～10 節）

- ①牧者たちの体たらく（7～8）「それゆえ、牧者たちよ、主のことばを聞け。わたしは生きている。一神である主の御告げ—わたしの羊はかすめ奪われ、牧者がいないため、あらゆる野の獣のえじきとなっている。それなのに、わたしの牧者たちは、わたしの羊を捜し求めず、かえって牧者たちは自分自身を養い、私の羊を養わない。」そこで、預言者エゼキエルを通して、牧者たち（祭司達、律法学者達）に語られます。主は生きておられこと、羊たち（ユダヤの民たち）が、かすめ奪われ、獣たちのえじきとなっていると伝えられます。なのに、牧

者達は羊を捜さず、自分の身のことばかりで、羊を養おうともしないという体たらく状態だ、と。

- ②羊を取り返す主 (9~10a)「それゆえ、牧者たちよ、主のことばを聞け。神である主はこう仰せられる。わたしは牧者たちに立ち向かい、彼らの手からわたしの羊を取り返し、彼らの羊を飼うのをやめさせる。」そこで、主は警告、宣言をされます。主は体たらくの牧者たちと相対し、彼らにまかせられていた羊たちを取り返し、もはや羊たちを飼う役割を彼らからはく奪するというのです。羊たちを治めるというのは、あくまでもユダヤの民の霊的な導きに関することで、本来神からの恵みの導きを預かっている牧者たちがその権限を取られるというのです。それほど霊的な危機が来ているのに牧者たちは気づかないのです。
- ③彼らは養えなくなる (10b)「牧者たちは二度と自分自身を養えなくなる。わたしは彼らの口からわたしの羊を救い出し、彼らのえじきにさせない。」主は牧者たちから、主の羊である民を救い出され、彼らのえじきにはさせないと言われるのです。なんと、ここでは獣のえじきではなく、牧者たちのえじきにはさせないという厳しいお言葉が伝えられているのです。

### 3. 父由 (11~16 節)

- ①主ご自身が世話を (11~12)「まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。牧者が昼間、散らされていた自分の羊を世話するように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。」ここで主は羊を救うための道を示されるのです。つまり、牧者に代わって、主ご自身が迷子となった羊の捜索をし、見つけたらその世話をされるというのです。本来ならば、牧者たちが、草を食んでいた羊たちを集め世話をするように、闇の世に放り出された羊たちを集めて世話をされるというのです。そうでもしなければならぬほどの危機なのです。
- ②牧場で草をはむ羊 (13~14)「わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。」今この節に至ると、ユダヤの民がバビロンによって捕囚されて自由を奪われている状態のことにも言及されます。イスラエル、ユダヤの地からバビロンなどにいる民を回復させることが預言されるのです。彼らはやがて、イスラエルの山々、谷川のほとりなどに戻されという明るい預言がなされているのです。
- ③養い育ててくださる主 (15~16)「わたしがわたしの羊を飼い、わたし

が彼らをいこわせる。一神である主の御告げ—わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う。」そして、羊たちを養い、憩わせる方は、主ご自身であり、主は捜索と連れ戻し、養護、病者への慰めと回復を与えると言われるのです。さらに「肥えたものと強いもの」とある偽の牧者たち滅ぼし、正しいさばきをなされるというのです。

《結論》 預言者エゼキエルはバビロンにあって、エルサレムの実状を憂え、その問題点を、主から御言葉を取り次いでいます。つまり、イスラエルやユダヤの国にとって大切なことは、神への信仰でした。それは政治の基礎にもなる重要な問題でした。ところがどうでしょう。今朝、私どもが読んできた記事を見ると、信仰を守り導く担い手である者たちの見ているところが曇っていたのです。ここでは「牧者」と記されている、祭司や律法学者、場合によっては偽預言者ともしえる者たちが、牧すべき羊に対して、なすべきことを怠ってしまったのです。つまり、羊たちが信仰を養うためには、神の御言葉が与えられ、主の前に当時のあり方としての礼拝がささげられていくことは欠かせませんでした。ところが、牧者たちは私腹を肥やし、羊たちに霊的食事を与えず、霊的に苦しんでいても労わらず、挙句迷子になっても捜さず、獣のえじきになっても良いと言った体たらくに陥っていたのです。国が破れて、多くの者たちが捕囚されても、その状態は同じでした。

そこで、主ご自身がそこに介入されて、迷子の羊を捜し出し、介抱し、養いをするということを宣言してくださっているのです。

政治的な意味においてのエルサレムへの帰還は、後になされることとなりますが、それ以上に大切なことは、上記に記された問題はイエス・キリストが来られる新約の時代にあっても残っていたのです。つまり、私たちは新約聖書のなかに出て来る、祭司や律法学者たちがとっている姿勢のなかに、エゼキエルの時代と変わらない問題を見る

のです。だからこそ、主イエス・キリストは、来られて、羊である者たちの真の救いのために、迷子になった羊たちを捜し出し、彼らを十字架と復活の福音によって救う道を備えられたのです。

預言者エゼキエルはイエス・キリストを預言していたといっても良いでしょう。主は、「わたしは良い牧者です」(ヨハネ 10:11) と言われましたが、まさに主は本当の牧者です。羊を捜し、養い、慰め、励ましてくださいました。世の中で外れてしまったような人々にも手をさしのべてくださいました。そして、ついには羊たちのために、犠牲となって十字架上で死んでくださいました。本当の牧者です。羊である私たちが、従っていくべき方は主イエス・キリスト以外にはありません。この方から目を離さないようにしましょう。

一方で、主はキリスト教会を建ててくださいました。そして、そこに働き人を立てる道も備えられました。牧師や伝道者も召しをいただき、その働きをします。とはいえ、そうした者たちも、この聖書記事に記されている指摘と同じような考え違いや間違った行動に進みやすいのです。ペテロの手紙第一 5 章 2~3 節にこうあります。「あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてするのではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。あなたがたは、その割り当てられた人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。」。今語っている者のためにお祈りください。また、私たち一人一人も、基本的姿勢は同じであり、悪い牧者(悪霊とそれに従う者)にだまされることなく、キリストのみに導かれて進み、主の教会に連なっていきましょう。